

西幼稚園学力向上推進計画

令和6年度報告

1 目 標：幼児一人一人の「確かな学び」を向上させ「生きる力」を育む幼児の育成

【学推の目指す幼児像】

「友だちのよさに気づき、認め合い、思いやりをもって関わり合える幼児の育成」

～子ども同士のつながりを深めるための「よさを認め合う」関係づくりを通して～

2 基本方針

- (1) 「幼稚園教育要領」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、「学校教育における指導の努力点」及び「伊江村学力向上推進要項」を踏まえ、本園の課題を解決するための取組や特色ある取組をより具体的に推進する。
- (2) 幼稚園で身につけるべき内容を定着させる取組みの充実を図る。
- (3) 学校・家庭・地域・行政が連携協力し、日常的な取組を推進する。
- (4) 学力向上マネジメントに基づき、実効性のある学力向上の取組をする。

3 推進のための6つの視点

- (1) **幼児の主体性を育む** 幼児の実態に沿った目標を設定し、幼児一人一人が主体的に活動に取り組める計画を立てる。
- (2) **幼児理解に基づく個別対応** 幼児一人一人の実態を把握し、一人一人の課題に応じた対応をする。
- (3) **具体的な目標と多様な体験の提供** 幼児一人一人の課題を明確にし、具体的な計画に基づいた幼稚園生活の中で、様々な学びの体験ができる取組をする。
- (4) **日常的な手立てと環境構成** これまでの成果と課題を踏まえた幼児一人一人への課題に対して、日常的な手立てや、援助の工夫をする。
- (5) **学びの基礎を培う** 幼児一人一人を把握し、実効性のある経験や体験を通し、学びの基礎の習得の推進。
- (6) **連携による学力向上** 園・家庭・地域・行政、校種間をつなぎ、目指す幼児、児童、生徒像の共有をし、連携を図り学力向上の取組を推進する。(連携)

4 取組の重点

◎15の島建ちを見据え、園、家庭、地域、行政が連携したこれからの時代に求められる資質・能力【資質・能力3つの柱】を幼児に身につけさせ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を踏まえた指導計画のもと、生きる力を育む。

(1) 確かな学力の向上

①「知識・技能の基礎」の育成

豊かな体験を通して、感じたり、気付いたり、分かたりできるようになる。

- ・ 基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得 ・ 身体感覚の育成
- ・ 規則性、法則性、関連性等の発見 ・ 様々な気付き、発見の喜び
- ・ 日常生活に必要な言葉の理解
- ・ 身体的技能の基礎や芸術表現のため の基礎的な技能の基礎の獲得等

②「思考力・判断力・表現力」の育成

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする。

- ・ 試行錯誤、工夫 ・ 繰り返し、次への見通し ・ 自分なりの表現 ・ 表現する喜び
- ・ 予想、予測、比較、分類、確認・他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ
- ・ 言葉による表現伝えあい

③「学びに向かう力、人間性等」の育成

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする。

- ・ 思いやり ・ 安定した情緒 ・ 自信 ・ 相手の気持ちの受容 ・ 好奇心、探求心
- ・ 葛藤、自分への向き合い、目的の共有、協力・色・形・音などの美しさや面白さに対する感覚
- ・ 自然事象や社会現象への関心等

(2)豊かな心の育成

①人間関係づくりの力をはぐくむ取組の充実

- 自己肯定感を高め、人とかかわる力を育む。○ 言葉による伝え合う力を育む。

②社会性を育む取組の充実

- 保・幼・小・中・地域等との連携を活かした保育の充実。
- 幼児期の特性を踏まえた生活経験の充実。

③規範意識・マナーの育成

- 道徳性の芽生えを育む取組。○ 身の回りの整理整頓や自他の物を大切にする取組。

(3)健やかな体の育成

①自分の体の健康について関心を持つ取り組み

- 生活との関連を図った健康づくりの充実。○ 日常的な運動、遊びをとおした体力作りの充実。

②基本的な生活習慣の形成

- 早寝、早起き朝ごはんなど、子どもの健康的な生活リズムの習慣化。
- 好き嫌いを減らすなど、バランスのとれた食事。
- 汚れたらどうするのかを自ら考え対応し周辺を清潔に保つ取り組み。

5 具体的な取組

園内研修による保育具体的な取り組み

「友だちのよさに気づき、認め合い、思いやりをもって関わり合える幼児の育成」

～子ども同士のつながりを深めるための「よさを認め合う」関係づくりを通して～

取組のねらい	内容・実施方法
◎よさを認め合う関係づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・構成的グループエンカウターの手法を取り入れ、子ども同士のつながりを深めていく。また、協同あそびを取り入れ、友だちとの関係づくりのきっかけにしていく。 *構成的グループエンカウターとは リーダー（教師）の指示した課題をグループ（小集団）で行い、その時の気持ちを伝え合い、心と心のキャッチボールをすること。自分や他者の気持ちに気づき、人間関係づくりを意図的・計画的に実践していくこと。 ・よさを認め合える場の設定と友だちのよさに気づき、認め合う関係づくりのための環境設定を工夫していく。
◎教師のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・教師のかかわり方や言葉かけ、援助の工夫。 ・日々の保育実践の中から保育記録の充実を図り、幼児の姿の変容をミーティング等で共有し援助の仕方について話し合い保育に活かす。 ・グループ活動を通し、友達との関わり合いが持てるよう手立ての工夫をする。
◎保護者との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・保育ドキュメンテーションやお便り、ICTシステムを活用して幼児の姿の変容を伝えていく。

(1)確かな学力の向上

具体的な取り組み：事例①ぴかぴかタイム（自分の道具の整理整頓）



自分の道具を整理すると気持ちがよくなることを知り、最初は整理整頓の方法を教えてもらい、次第に自分で考えて身の回りを整えようとしていきます。（自立心）

友だちの整理の仕方を知り、お互いに確認し合うことで、よりよい整理整頓の仕方を見つけていく姿がみられるようになってきます。

事例②



- ・園庭で見つけた「オオゴマダラ」の幼虫。「みんなでお部屋で育てたい！」と、お部屋を作り、お掃除をしたり、餌を入れたりとお世話が始まりました（自然との関わり・生命尊重）
- ・次第に図鑑で調べたり、チョウの生長の様子を思い思いに表現したりする姿が見られるようになりました。

(2) 豊かな心の育成

具体的な取り組み 事例①いいところみつけた！（よさを認め合う関係づくり）



- ・最初は先生が「お友達のいいところをみつけたよ！」とお話をしながら、みんなの前で認めてもらう経験をします。（自己肯定感アップ）



- ・次第に友達同士でよいところに気づき、認め合う姿が見られるようになってきました。

事例② 友だちと一緒に活動する楽しさを味わう（人間関係作り）



- ・4月、環境の変化に戸惑う様子を見せる子もありますが、友達と一緒に過ごす楽しさを味わうことで園生活が楽しくなっています

- ・虫博士の子が、図鑑などを見て知ったことを友達に説明しています「次は動くよ～みててよ～」 「ほんとだ！おもしろい！」

- ・「みんなで卒園のお花をそだてたいね～」と始まった卒園のお花育て。「どう？大きくなって？」「水かけしてくれてありがとう！」優しい言葉が聞こえます。

(3) 健やかな体の育成

具体的な取り組み 事例①フロアリズム、竹馬遊びを通して



- ・「苦手なことにも友達と一緒に頑張れる」と挑戦しようとする気持ちを大切にしながら、保育者や友達に見守られ励まされ、挑戦できるようになっていきます。（健康な心と体）

- ・保護者の協力をいただき、自分の竹馬を作り、2年間かけて少しずつできるようになっていきます。乗れるようになってきたら大きな竹馬にも挑戦していきます（達成感、充実感）

事例②給食を通して



- 最初は自分が食べられる量を知ることから始まり、次第に調整してもらいながら自分の食べられるものや量を知っていきます。「減らしてください。」(言葉による伝えあい)
- 苦手なものも一口ずつ食べる経験をします(健康な心と体)

- 苦手な食べ物も少しずつ食べられるようになり、友達と一緒に食べることを楽しめるようになります。
- 5歳児は配膳の経験をし、8時登園の習慣化や基本的な生活習慣が身につく、食べられる量が増えてきます(基本的な生活習慣、健康な心と体、自立心)

成果と課題

成果

- 構成的エンカウンターを取り入れたことで、特定の友だちとしか関わらなかった子どもたちが、普段遊ばない友だちとも交流するようになった。その結果、互いに声を掛け合い、一緒に活動したり遊んだりする姿が見られるようになった。(協同性、コミュニケーション能力の発達、豊かな心の育成)
- よいところ探しを通して、教師や子ども同士で友だちのよい行いを認め合う場面が増えた。また、友だちのよい行いに気づくことで、自分もそのような行動をしようとする姿が見られるようになった。その結果、優しい行動や言葉かけが増えた。(道徳性の向上、規範意識の芽生え、豊かな心の育成)
- 教師や保育者が子どもたちを温かく見守ることで、子どもたちは安心して様々な活動に取り組めるようになった。失敗しても互いに励まし合い、助け合う姿も見られるようになった。(自己肯定感の向上、協同性の発達、豊かな心の育成)
- 帰りの会で友だちのよさを認め合う場を設けたことで、子どもたちは友だちのよいところに気づき、認められることで自信を高めた。その結果、様々な活動に意欲的に取り組むようになった。(自己肯定感の向上、主体性の向上)
- 入園、進級当初は、言葉でのコミュニケーションが十分にできず、トラブルが多かった。しかし、保育者が子どもの気持ちを丁寧に聞き取り、言葉で表現する手助けをすることで、徐々に自分の気持ちを伝えられるようになった。その結果、子ども同士で話し合い、解決しようとする姿が見られるようになった。(コミュニケーション能力の発達、問題解決能力の発達、豊かな心の育成)

課題

- 言葉の発達がゆっくりな子や、自分の気持ちを丁寧に伝えようとする子は、相手にうまく伝わらず困ることがある。そのような子どもたちを丁寧に見守り、必要に応じて気持ちを代弁し、相手の気持ちを推測して伝えるなど、橋渡し役となる保育者の支援が必要である。
- 相手を傷つける言葉を使う子どもが見られる。遊びや生活の中で、子ども同士の関わりを丁寧に見守り、状況に応じて適切な言葉遣いを教える必要がある。保育者自身が手本となるような言葉遣いを心がけ、全職員で共通理解し、連携した支援体制を構築することが重要である。
- 子どもの豊かな人間関係を築くためには、家庭環境も重要な要素となる。園での様子を伝えたり、家庭での関わり方について情報交換したりするなど、家庭との連携を密にすることで、子どもの情緒安定や学びへの意欲を高めることができる。
- 幼児期に「確かな学び」を身につけ、「生きる力」を育むためには、豊かな人間関係が基盤となる。互いを尊重し、思いやりの気持ちをもって接することで、困難な状況にも協力して立ち向かうことができる。そのためには、職員が共通理解し、継続的な研修を通して保育の質を高める必要がある。